



**Data**

監督: 行定勲  
原作: 又吉直樹『劇場』(新潮文庫)  
出演: 山崎賢人/松岡茉優/寛一郎  
/伊藤沙莉/上川周作/大友律/井口理/三浦誠己/  
浅香航大

### ■■ショートコメント■■

◆又吉直樹の芥川賞受賞作品『火花』(17年)がすぐに映画化されたのは、ネタ不足に悩む邦画界では当然。同作が芥川賞に値する文学作品か否かは別として、私の大好きな岡村孝子の1987年のヒットソング『夢をあきらめないで』をテーマにした(?)同作は、それなりに興味深かった(『シネマ41』62頁)。

そんな芥川賞作家・又吉直樹が受賞前から書き始めていた、作家の原点ともいえる小説で、『火花』の発表2年後に完成した小説が『劇場』らしい。私は同作を空港での時間待ちの間に30分くらい立ち読みして、ほぼ全体の内容を把握していた。そして今、予想通り、それを映画化した本作が完成し公開に。もともとそれほど観る気はしていなかったが、監督が行定勲と聞き、こりゃやっぱ観ておかなくちゃ・・・。

◆本作冒頭、いかにも作家・又吉直樹の好きそうな(?)不器用な若者・永田(山崎賢人)がかなり絶望的な状況で登場し、天然キャラ丸出しの女の子・沙希(松岡茉優)と何ともケタイな出会いを果たすストーリーが展開していく。これはこれで悪くはないし、「これぞ又吉文学の世界!」という意味で理解できる。しかし、そんな風景をスクリーン上で見せながら、さらに永田の一人称で、小説を読むように解説していくのは、いくら何でもくどすぎるのでは?しかも、それが全編通じて……。さらに、それが136分も……。

◆沙希はなぜ永田に惚れたの?それが男の私にはサッパリわからないが、それはさておき、今ドキ沙希のような(トコトン男に尽くす)女がホントにいるの?また、カネを稼ぐ力を持っていない永田が布団一枚で沙希の部屋に転がり込むのは、私たち昭和の時代の青春だったはずだが、かろうじて又吉世代でもあったの?それなら、それもそれでいいのだが、

いくら大阪人だとしても(?)、光熱費の負担を全くせず、あそこまで厚かましくモノが言えるの？

また、又吉恋愛文学で私が最も不思議に思うのは、若い男女が同棲生活をしているのにセックスが全く描かれないこと。昭和の時代を代表する恋愛漫画が上村一夫の『同棲時代』だったが、それを地で行っていた私の友人たちは、あっちでもこっちでも“妊娠騒動”を生み、その対処が大きなテーマになっていた。しかし、本作のスクリーン上に見る永田と沙希の、その方面での清き関係(?)は一体ナニ・・・？

◆観客の目には、本作後半からの2人の破綻が明らかだが、本作が136分と長尺になったのは、その後も“つかず離れず”、あるいは“離れたりくっついたり”の関係が迷走していくためだ。結局、沙希は東京での生活を諦め、故郷に戻り社会人になるから、その後は地元で結婚、出産といういかにも普通の女性の一生が始まるのだろう。又吉文学はその直前の一瞬だけを切り取り、主人公の永田に尽くす女を創造しているが、こりゃいくら何でも女の方がソン。

他方、“ナガクン”こと永田は、沙希から「一人で生きていける？」と心配されながらも、「うん、大丈夫」と答えていたように、きっと大丈夫だ。ラストの自転車の2人乗りのシークエンスは法的にはよろしくないが、ストーリーの結末の演出としては、さすが行定監督と思える工夫。そして、それがそのまま「劇場」のシークエンスに転じていくところも面白い。しかし、肝心の劇とセリフがこれでは、残念ながらイマイチ・・・。

2020（令和2）年4月7日記